

# JSCA指導者検定会・カヤックベーシック課程 報告書

2018年6月1日

ウクディパドリングスクール・石川義治

## ■開催データ

- ・開催日：2018年5月29日～30日
- ・主 管：ウクディパドリングスクール
- ・会 場：長野県信濃町・野尻湖
- ・検定員：石川義治（カヤックイントラトレーナー：全課程担当）
- ・デ モ：小野彰太（カヤックインストラクター1：I-nac教員）
- ・受験者：4名（国際自然環境アウトドア専門学校生）

## ■開催背景

この検定会は、『国際自然環境アウトドア専門学校（I-nac）』の『アウトドアスポーツ実習（カヤック）』の中に、JSCAベーシックインストラクター課程を組み込んで実施し、2016年度より継続中。

### ★実習目的：

本実習はカヤックに関する基礎的な技術の習得ならびに指導資格の取得を通じて、自然体験活動の指導者としての資質を高めることを目的として実施する（実習実施要領より）

### ★実習対象者：「野外教育」及び「インストラクター」課程専攻の2年生

※1年次にカヤック（静水でのリバーカヤック）を含めて様々な野外活動の体験者

## ■実施方法

専門学校の実習授業でもあるので、その効果も考え、検定日程としては変則的なプログラムとなり、実施内容は下記の通り。

※検定に関わる内容は【】で表記

日程	実施内容
5/28	午前：静水講習・基礎パドリング 午後：静水講習・基礎パドリング 【夕方：講義1＋ペーパーテスト】
5/29	午前：静水講習・基礎パドリング 【午後：安全技術研修・レスキュー実践】 【夕方：講義2＋ペーパーテスト】
5/30	【午前：実技検定 1) 漕艇技術 2) 指導技術＋フィードバック】 【午後：安全技術研修・SRP補講（安全装備、ロープレスキュー等）】 【夕方：講義3＋ペーパーテスト】
5/31	川下りツーリング：セルフレスキュー実践

## ■検定結果

- ・認定要領満了者4名（内、認定/入会希望者3名）／受験者4名  
※詳細内容は別紙採点結果参照

## ■知識課目：各科目に副題をつけて講義

### ★総論：『JSCAシステム』と『イントラ／ガイドとしての心構え』

実習授業の一環として検定を受験することになった学生達（積極的にJSCA検定に受験しに来たわけではない）なので、JSCA制度（構成員、認定資格、会員の権利と義務、JSCA指導者の活動について等）の概要をしっかりと説明した。

心構えとして、一般的なリスクマネジメントやカヌー活動の特徴から導入して行った。

また、歴史的背景を交えながら、カヌー用語の多様性なども補足説明しておいた。

### ★安全について：『安全管理の考え方』と『カヌー活動特有の症例』

まず最初に事故事例（湖での事故）を出し、リスクの洗い出しやそれらに対する対応策などを考えてもらった。そして、なぜ事故が起きるのかを考え、そこから安全管理の基本的な概念である「セーフティ概念の3要素」を提示し、3要素に沿って「事故を防ぐためには」をレクチャーしていった。

後半は、リスク認知で洗い出したカヌー活動における事故種類（溺水、ハイポ、ハイパー、負傷等）に沿って、症例の特徴とその予防と対処法についてレクチャーした。

### ★カヌーの基礎知識：『カヌー活動の特徴』となる『フィールド』『道具』『技術』

カヌー活動の特徴を再確認した上で、フィールド／道具／技術を知ることがリスク軽減に繋がる事を強調しながら進めた。

【フィールド】においては、主たる活動場所が静水（湖沼）であることを想定し、風を中心にレクチャーを進め、気象情報の読み解き方をアドバイスした。

【道具】については、適切な道具を選択するためには何が必要なかを強調し、安全技術・水上実習を通して体験した事を例に出しながらウエアリングの重要性を伝えた。

【技術】については、「上達（出来ない事が出来るようになる）はリスク軽減&楽しくなる」という事を確認した上で、効率の良い（負担をかけずに楽しませながらいつの間にか上達する）インストラクションをするためにはカヌー技術を知る必要がある事を強調した。

## ■安全技術

この検定は、専門学校の実習授業の中で設定されており、授業としての実習は川下りをする事も目標となっているので、『リバーカヤックを使用して川下りをする』という前提で、静水で安全技術研修を実施した。

### ★水上実習

自身を守るセルフレスキューでは、静水（再乗艇、牽引スイム）や流水（漂流ポジション、牽引スイム）を想定した体験をもらった。

漂流者を救助するレスキューでは、ロープを使わないボートによる牽引レスキューとTXレスキューを体験してもらった。

### ★陸上実習

フィールドと道具の観点から見た安全装備について、その装備の意味を知る事をテーマに進め、なぜそのような装備が必要なのかを理解してもらうようにした。

その上で、リーダーとしてチームとして携行する必要がある備品は何かを考えてもらった。

補足的にはなったが、フィールドでのコミュニケーションとして、パドルサインやホイッスルの利用について伝えた。

## ■指導技術

課題が3に対して受験者が4という比率に対して、今回は設定に非常に迷ったが、なんとか公平性を保った設定と判定が出来たのではと思う。

フィードバックでは、印象に残るメリハリのある伝達方法を中心に考察した。

## ■所感

実習授業との組み合わせをしながらのJSCA指導者検定会の実施なので、カヌー経験値の少ない学生たちにとってはかなりハードな内容となっていると思うが、身体的負担や精神的負担を少しでも軽減し、総合的にスキルアップができるよう、時間的な配慮（休憩時間や自由時間の設定を含めたタイムテーブル）や伝達すべき事項の絞り込み等を心がけて実施した。

- ・自身のカヌー漕艇技術のスキルアップ：最低限、初級の川下りができる技術
- ・カヤック種目を通してアウトドアアクティビティ・リーダー（指導者）としての自覚と認識  
→アクティビティ・スキルとセーフティ・スキルの関連

担当教員は、上記のような実施内容となる事を、事前のオリエンテーションで学生たちに伝えていたので、学生たちはそれぞれ概ね良好な（実力を発揮し、現状を把握し、今後何をすべきかを知る）結果となったと思う。

担当教員はもちろん受講した学生も含めて、アクティビティ技術へのアプローチ（考え方や効果的なスキルアップ等）とそれに関連させたセーフティ・スキル&マネージメントを有しているJSCAプログラムに対する評価は高いものと思われる。

→そのように信頼して頂けるように、検定員は伝達能力等を含めて、常に総合的に努力しなければならない事を改めて認識する必要がある事を感じた

